

Rotary Club of SUGITO

杉戸ロータリークラブ週報

2008～2009年度 RIのテーマ

Make Dreams Real



会長 田中昌夫 幹事 大作 茂

第1948回例会(2008年10月21日)

点鐘

田中会長

ロータリーソング それでこそロータリー

会長挨拶

田中会長



先週は藤田パストガバナーに卓話をお願いしましたが、とても素晴らしいお話でした。

藤田パストのお話はセミナーで聞いたことがあるのですが、パワーポイントなどを使わずにご自分の体験からいろいろなお話をして頂けるので、とても参考になります。そして早速このようにお礼状が届いておりますので、本当に「ご縁」を大切にしているなと思いました。

さて、今週のロータリーニュースは「国連フォーラムでRI会長が講演」と「徹底した予防接種活動でポリオ撲滅を目指すパキスタンのロータリアン」の二つを紹介します。

まず、ニューヨークで開かれた主要な政府や民間のリーダーが出席するフォーラムで、李会長はポリオを撲滅し、より健康的で平和な世界を築くために国連に協力していくというロータリーの姿勢を再び強調しました。「ポリオという病を根絶し、国連ミレニアム開発目標の4番目である「幼児死亡率の引き下げ」を実現するために、ロータリーは世界中の人々を団結へと導きました」と、保健と教育に関する分科会で

の講演で李会長は述べました。「私たちは、種類の病の撲滅をはるかに越え、末永い恩恵をもたらすことのできる協力関係を生み出しました」次にパキスタンのロータリアンのニュースを紹介します。「パキスタンのペシャワール・ロータリークラブの会員たちが、世界で一番の僻地、しかも危険地帯とされている場所で、子供たちへの予防接種活動を援助しました。パキスタンで9月15日から17日にかけて実施された準全国予防接種日に参加したクラブ会員たちは、治安の悪いアフガニスタン国境付近にあるパキスタン西北辺境州の連邦管轄部族地域の子供たちを対象に、予防接種を行いました。「この地域には320世帯あり、現地の部族の生活は、教育や医療、通信など、あらゆる面で発展が遅れています」と言うのは、クラブ会員のスエド・フェロズ・シャー氏です。予防接種キャンペーンの前に「部族の長老たちを集め、部族民が予防接種会場に足を運ぶよう働きかける説明会を行いました。特に部族の若者たちは、この説明会に熱心に参加していました。また、ポリオの認識向上を目的としたウォークを行い、ポリオの予防接種について宣伝して回りました」とシャー氏。

幹事報告

大作幹事



例会日： 火曜日 12:30～13:30 例会場： 埼玉りそな銀行杉戸支店 3F

事務所： 杉戸町杉戸 2-12-26 埼玉りそな銀行杉戸支店内

TEL 0480 - 34 - 1716 FAX 0480 - 34 - 1360

地区大会「展示パネル」への展示用写真等の提出のお願いがきております。

バーミンガム国際大会ご参加の推進がきております。

「友」インターネット速報 No 8 がきております。

各クラブより例会変更が届いております。

委員会報告

社会奉仕委員会

篠原委員長



先日お願いしましたバザーの品物ですが本日例会終了後、3時ごろから集めに伺いたいと思います。また、品物の値付けですが23日(木)午後2時から田中会長の事務所で行いますので、奥様方のご協力をお願い致します。

卓話

下津谷会員



先日舟越さんから連絡があり卓話の依頼をされましたが、さて何を話そうかと考えました。そこで私が落ち込んだり、老いを感じたりした時に「これを読めば元気に成る」というような文をいくつか抜粋して紹介を致します。

まず、サミュエル・ウルマン(アメリカ合衆国の実業家(詩人・教育者)が80歳の記念に自費出版した『80歳の歳月の高見にて』に収められた詩”YOUTH“(青春)です。この詩はダグラス・マッカーサー元帥が座右の銘として執務室に掲げたことから、日本でも知られるようにな

り、松下幸之助も座右の銘としていたそうです。

『青春とは人生の一時期のことではなく心のあり方だ。若くあるためには、創造力・強い意志・情熱・勇気が必要であり、安・易(やすき)に就こうとする自らを戒め、冒険する心を忘れてはならない。人間は年齢(とし)を重ねた時老いるのではない。理想をなくした時老いるのである』・・・『希望ある限り人間は若く、失望とともに老いるのである。』

次に NEWSWEEK2008年9月3日号より「老いが私に教えてくれたこと」ということでイギリスの俳優カーク・ダグラスが書いておりますので紹介します。「共に年を取ろう!/最高なのはこれからだ/人生の最後のために、最初はつくられた」。詩人のロバート・ブラウニングが若い頃に書いた詩だ。年老いた今、私はこの詩の本当の意味がわかるようになった。老いというものは、運よくそこへたどり着くことができれば、人生でまたとない経験となる。老いに対処するカギは、自分で見つけなければならない。一つは、自分を笑い飛ばすこと。私はもうじき92歳。「どうにか生きてるよ」と言うと、みんな笑う。そこで私はこうつけ加える。「青いバナナは買わないんだ。熟するまで時間がかかるから」。ユーモアは長寿の秘訣だ。ずいぶん前のことだが、私は死にゆく母のそばに付き添った。怯えた私は母の手を握った。母は目を開けて私を見た。母が最後に言った言葉は「怖がらないで、死はみんなに訪れる」。年を取るにつれ、その言葉が慰めになった。死はみんなに訪れる。ただし私は「自分以外のみんな」だとずっと思っていた。

最後に埼玉新聞に載っていた記事を紹介します。養老孟司氏が「老人よ、重職を担うな」と書いております。まず老人が重要な公職にあっていいか。これはダメだと思う。なぜならもはや体力がなく、無理をすると死ぬかもしれないからである。なにがなんでも長生きすればいいという意味でいうのではない。重大な職務の途中で倒れたのでは、結局は職務に無責任になるということである。それを思うと、現代の日本では引退の時期が遅すぎないかと思う。早く引退しておけば、あんなひどい目には遭わなかつ

たはずなのに。近年そう思う事例が数多い。あえていわないが、いくらでも思い当たるであろう。ということは、現代日本では「老人の使い方が重過ぎる」ということである。老人を大切にすることは、いつまでも重い役職に就けておくことではない。高齢化社会を迎えて定年延長を言う人も多いが、若者が就職難で、他方で定年延長では、老年のワガママといわれてもやむを得まい。偉い人に向かって「そろそろ引退したら」とは、だれだっていいにくい。しかし引退の時期を誤ると面倒なことになりかねない。若い人たちが未熟で、組織の内部でいろいろモメたととしても、それ自体が若い人たちの教育になる。老人がモメごとに巻き込まれたって、疲れるばかり、後の教訓にならない。教訓になったところで、本人にはもはや次がないのだから、教訓の意味がないではないか。組織の上のほうは、少なくとも四十代、五十代にすべきであろう。いまの日本では若すぎるといわれるであろうが、それをいうのは老人に違いないから、耳を傾ける必要はない。明治維新を考えてみればいい。重い職務をはずしたら、なにをすればいいのか。・・・できれば自然を相手にして、毎日いくらかでもそれにかかわる。年金を出すのであれば、そうした仕事への報酬とすべきではないのか。一人でする仕事だから他人に迷惑をかけない。老年になったら、それぞれの人がそういう仕事を持つべきであろう。かつてはそれが盆栽だったり庭木の手入れだったりした。いまでは社会が複雑になったから、考えようによっては仕事はいくらでもあるはずである。そもそもいい年をして自分の仕事を他人に指図されることもあるまい。自分で考えればいいのである。

出席報告

篠原会員

出席免除 2名

月日	会員数	出席	欠席	MU	出席率
10/21	30	15	15	7	73%

スマイル報告

篠原会員

田中会長・・・本日は下津谷さん卓話ありがとうございます。

関口会員・・・秋の気配「白玉の茜にしみとお

る秋の夜は・・・酒の美味しい季節です。

古谷会員・・・早川さんの笑顔につられてスマイルをたくさん入れてしまいました。

武井会員・・・下津谷さん、卓話大変勉強になりました。

下津谷会員・・・拙い卓話で申し訳ありません。

黒岩会員・・・米山の寄付よろしくお願ひします。

舟越会員・・・下津谷さん卓話ありがとうございました。大変参考になりました。

長岡会員・・・しばらくぶりです。

下津谷会員卓話ありがとうございます。

以下同文・・・篠原会員、庄司会員、中島会員、渡辺良一会員、鈴木会員、渡辺洋子会員、細井会員

本日投入額	18,000円
累計額	312,000円